大阪府立西淀川支援学校
研究支援部

情報ボックス（No.２６）

今回はNo.２３でご紹介した「認知教材」について、さらに詳しくお伝えしていきます。

教材の選び方

No.23の情報ボックスでは、本校でよく使用される認知教材の一部をご紹介しました。ただ、ご覧いただいた中には、こんな風に感じられた方もいるかもしれません。

教材にいろいろな種類があることは分かったけど、
今 自分が関わっている子どもとは、どの教材で学習するのがいいんだろう…？

本校でも、各教員が試行錯誤しながら児童生徒の教材選択や作成に取り組んでいます。その際に最も重要なことは、その児童生徒の**行動をよく見て**発達段階を知ることです。

その子にとって難しすぎる教材ではないか？目標に沿った教材を使用できているのか？児童生徒の姿をしっかりと見て判断することが重要になってきます。

児童Ａの例を参考に考えてみましょう！

（例）

児童Ａの実態

・目線が合いにくく、漠然とながめているような様子が多い。
・音が鳴る教材を手に持って振ることがあるが、視線を向けず、すぐに放すことが多い。
　または、ずっと持ち続けている。

実態から考えられること

・目から情報を得ることが苦手で、耳からの情報（音）のほうが少し受け止めやすい。

・活動の「終わり」に気づくことが難しい

ということが予想されます。

このことから

指導の観点・教材例

　発達が初期段階の子どもたちにとって、最も受容しやすい感覚は「前庭感覚（揺れ）」や「固有感覚（関節への刺激）」、また「触覚」であり、それに次いで「聴覚」、「視覚」という順序性だと言われています。

つまり

　「よく見て教材に触れてほしい！」と思っていても、ほかの刺激（音や揺れなど）が多いと視覚が使われにくくなってしまうことが考えられます。

　よって刺激は少なく、また１つの行為の始点（始まり）と終点（終わり）をわかりやすく、シンプルにすることが重要になります。

＜教材例＞

１、玉落とし

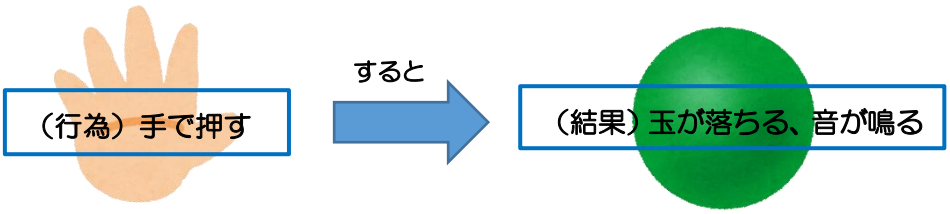
手のひらで押すことによって、ボールが穴に落ち、「カタン」と音が鳴って転がり出てくる玩具です。
簡単な行為（手で押す）によって、決まった結果（音が鳴り玉が転がる）が返ってくるので、例のような発達が初期段階の児童生徒たちにも活動がわかりやすい教材になります。

２、ビーズ引き

プラスティック容器のふたに穴をあけ、ビーズを付けた紐を通した手作り教材です。持ち手を引っ張るときに手に軽い抵抗を感じられて意識を向けやすく、全部抜けたら「終わり」がはっきりとしていてわかりやすい教材です。

＜指導の中で意識すること＞

上記のような教材を使用することで、自分の行為と、それによる結果との因果関係に気づき始めていくことが考えられます。



また、行為の始点（始まり）と終点（終わり）を自分で作ることができるようになることで、人とのやりとり、コミュニケーションの原点になるといわれています。

そして指導の際には、児童生徒たちにとって学習しやすい（ほかの刺激が少ない）環境設定や、自発的な動きを待つ時間をしっかりと作ることもとても大切です。

まとめ

たくさんある教材の中で、児童生徒一人ひとりに合ったものを選ぶには、その子どもの様子をよく見て発達段階を知ることが重要です。本校では、その際の指標として、「感覚と運動の高次化理論」（宇佐川浩）などを取り入れています。

さらに詳しく知りたいと思ってくださった地域の学校園の教職員の方は、本校の支援相談窓口までぜひお問い合わせください。